まっちゃんと愉快でもない仲間たち

光★

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まっちゃんと愉快でもない仲間たち

【Ｎコード】
Ｎ００９６Ｄ

【作者名】
光★

【あらすじ】
まっちゃんと愉快でもない仲間たちと繰り広げない物語

あらすじ

やあやあみなさーん僕の名前は松本順平よろしーく
なんで自己紹介したかって？そりゃー今からある物語を話すからさぁ
俺はその物語の主役＝出番が多いわけだ
だから名乗ったと言えよう
今から語る物語はねぇ俺が中二の時まぁぴちぴちの学生さ
おおっと別にこの話は恋空？みたいな話じゃない
普通の学生の話さーーーー

幼なじみはオタク

俺の名前はーーーーーーー
次回へつづく

やっぱだめだよね？
俺の名前は松田淳平！！ヨロシク！！
この物語は恋空みたいなラブストーリさ

・・・嘘だよ
まあ自己紹介はここら辺にして愉快でもない仲間達を紹介するかな？
あっ言っとくけどこの物語はくそつまんないからすぐ閉じた方がいいよ？
では行きますよ？

一日目幼なじみはオタク

「寒！！寒！！寒！！寒！！」
変な一人事を言ってる少年こそ松田淳平主役である！！
説明しよう！！今なにをしているか！！登校しているのだ！！
以上ナレーションの浜口さんでした
「何でこんなに寒いんだよ！？」
説明しよう！！ここは北海道そして札幌だ！！
以上ナレーションの浜田でした～
「淳平殿～～～～～！！」
奇声を発しながらいきなり現れたこいつの正体は・・・
「今日も寒いでござるな～淳平殿～？」
「相変わらず変な喋り方でごじゃるな」
「はっはははきにしないでござる」
この変な忍者（謎）は俺の幼なじみ名前は服部雄三なんかいかにも忍者みたいな名前だから
こいつの喋り方がこうなったわけじゃない
理由は・・・メンドクさくなったんでまた今度
「それはそうと淳平殿理科のワークやってきたござるか？」
微妙に違うような気がする
「俺がやってこないわけがあるだろ？」

我ながらわけのわからない喋りだ
「どっちでござる？」
「やってきてない」
「なら拙者が見せて差し上げるでござる」
「まじで！？持つべき物は忍者だな～」
「それを言うなら持つべき物は手裏剣でござるよ？」
「はっ！？」
「だから持つべきものは手裏剣でござるよ？」
「・・・・」
「どうしたでござるか～？」
「なんでもない」
そんなこんなで学校へついた

教室

「おはようでござる～」
「オーハーヨーウ」
服部はふつうに俺はなんとかみたいな感じで言った
「おっす淳平と忍者」
がたいがいいやつがこっちにきて挨拶をした
「おっす賢治」
「やや賢治殿？」
「なんで疑問系なんだよ」
「なんとなくでござる」
「なんとなくかよ！？」
説明しよう！！こいつの事は次回やる！！
以上ナレーションの浜地でした？

「おーい座れ」
「やば座るぞ！！雄三！！賢治！！」
「御意」
「あー日直」

一時間目国語
「拙者の得意科目でござる」
二時間目技術
「2ちゃんねるをチェックせねば」
「またかよ！？」
三時間目体育
「はあああああ忍法分身の術」
「ただ反復横跳びしてるだけじゃねぇか！！」
四時間目理科
「忍術を会得するには科学技術も必要である！！」
給食時間
「は～今日は疲れたでござるな～」
「おーい雄三ザンギいただきぃ☆」
「拙者のザンギがあああああ」
「ゆだんするからさ～」
俺はザンギを一口で食べた
服部は悲しそうな顔をしてた
「はあああああ」
昼休み
「山田殿この間の○○みたでござるか？」
「みてないよぉぉぉ」
五時間目社会
「忍者になるには歴史を学べばいけないでござる」

「あっそうなの」
六時間目英語
「・・・・ニンニン」
「はっ！？」
放課後
「淳平殿～かえりましょうぞ」
「あっいいよ～」
俺はマスオさんのように言った
「決定でござるなではミンナ行くでござる」
「おー！！」
「まじで？」
服部雄三は人望があるなぜかそれは人を選ばないから
だからどんな奴にも好かれるってわけだ
帰り
「で～あのアニメはＯＰがやばいですね～」
「わかるでござる～あのカニエちゃんは萌えるでござる～」
俺はおたトークについてけなかった
悔しい
「カニエってなんだよ！？」
「ぷっカニエちゃん知らないとは＾Ａ＾（笑）」
「調子にのるなよ？山田！！」
「調子にのってるのはずばりｍｐ（＾Ａ＾）君だ！！ぷーーー」
「なにを～でぶのくせに」
「二人共やめるでござるよ～」
止める服部
「ふっ・・・わかったよ」
クール風にきめる山田（豚）
「わっわかったよ」
なぜか小物風の俺
「では我が輩はここまでさらばだ」

「きをつけるでござるよ～」
歩き出す俺達
「雄三ってなんか人望あるよな？」
「ん？そうでござるか？」
「だってあの山田となかいいんだもん」
「山田殿とは話が合うでござるからな」
さわやかな笑顔でそういった
「そうかーーー」
「では拙者はここら辺でまた明日」
「じゃあなー」
別れの挨拶をした
「・・・・」
俺は服部と幼なじみな事がちょっと誇りだ
ちょっとだけな
俺は人望もなんもないからな～
俺はこれから先色々な事に遭遇する
まあこんときはしるよしも無かったけど

次回へ続く

意外に重要（前書き）

前回ぐらいまでのあらすじ
更新が遅い作者と勇者ラクスの決戦が始まる

意外に重要

「カナリアァァァ！！」
俺は今春の空の下カナリアを探していた。
なぜカナリアを探してるのかというと

二時間前
「ふっふっようやく外に出れたぜ」
俺はある理由があり母にいえに閉じこめられたのだ
しかしそこは俺なので脱走したしかし
「さああのうるせぇ婆が帰ってくる前に・・・なんじゃこれ」
俺がみたのはカナリアの入ったカゴだった
「カナリアじゃねぇか　どうした？
そんなとこに閉じこめられて？　よしよし俺が出してやるからな～」
ガチャッ
　　バサッバサッ
「もうつかまんなよ～」
俺はこのとき我ながら良い事したなぁと思ったが・・・
「うわあああああたちのカナちゃんが～～」
謎の女の子が走ってきた
「げっやば」
俺は一瞬でやばい空気を感じた
そう俺の本能がここにいたら死ぬと感じたのだ
「こらあああああ！！じゅんぺえええい！！」
やはりきたな我が宿敵遠藤さん
しかし俺はそこで逃げないで冷静に対応することにした
「あっはっはっ　どうしたんですか遠藤さ・・・」

バキッ！！
「どわあああああああ」
俺はんを言い終える前に瞬殺された
俺は本当に瞬殺されたのだ
誇張とか冗談なんかじゃない
俺はなにをされたのかもわからないうちに倒されたのだ

「いや・・・ほんとすんませんでした」
「うわあああんカナちゃあああああん」
「今おじいちゃんがつかまえてやるさ～」
「・・・孫ぼけじじぃ」
バキッ！！
「誰がじじいじゃ！！」
「なっ・・・殴ったねおやじにも殴られた事ないのにぃぃ」
俺はアムロ・レイかのように言った
「おやじに殴られた事ないだと～」
なっなんだって！？
「だからあまったれるのだ！！」
バキッ！！
遠藤さんは華麗なフックを決めタ
「ほっ☆が見えるよ・・・」
しかし俺は俺は俺は

「じゃあ探しにいくんだぞ」
「いえっさーしれいかんでは行ってきます」

というわけだ途中はしょったとか言うなよ？

「くそーカナリアミツカンネェナ」
おれは必死にカナリアを探していた笑
しかしいっこうに見つからない
いや見つかるわけないだろ
ここ札幌だぞ
こんな広い世界でみつかるわけ・・・
「あった・・・」
俺はあまりの都合のよさに友人がだれか死ぬような気がした
カナリアは公園にいた
「ふっふっふ見つけたぞ！！　カナリア！！」
バキッ！！
「えっ！？」
「どわあああああああ」
俺はまた瞬殺された

順平の視界は真っ暗になった

「うちのピーちゃんになにするんじゃああい」
俺はごついおやじの声で目覚めたと行っても過言ではない

「そのピーちゃんとはいつ出会ったんですか？」
俺はＮＥＷＳのアナウンサーのように聞いた
「さっきじゃい」
俺は・・・うん初めて人に殺意がわいたね
「あの～具体的にはどのような出会いをしたんですか？」
「それは・・・数分前のことじゃった」
出会い早っ！！
俺はそんなことを思いながら聞いた
「さっき散歩をしてたら　いきなりわしのあたまに鳥がきてのかわいいもんでわしのものにしたんじゃい」
「ネコババじゃねぇか！？」
「まさか貴様ピーちゃんの飼い主か！？」
なにか感づいたように言うおっさん
「そうだ　だから俺のフェニックス返せ」
「うーん」
考え込むじじいだがその時
「たつろうか・・・？」
遠藤のじじいがきた
「はっ？なんで遠藤さんがいんの？」
「貴様がまじめに探すようにつけてきたんじゃい」
「あっそうすか」
「そうじゃ　だがなんでここに達郎がおるんじゃ？」
「はっ？達郎」
「このじじいじゃよ」
遠藤さんが指さしたのはさっきのテディベア（じじぃ）だ
「うーん」
テディベアはまだ考えてるし

その後俺は母さんにつかまった
カナリアはみつかんなかった

省略したトコは後にでてくるさ

つづく

雪の日の出来事（前書き）

前回までのあらすじ
前回勇者ラクスは大事な仲間を失いながらも
魔王のもとへとたどりつく

雪の日の出来事

なんか良い事ねぇかなーーーーーー
俺はいつもそう考えてた。いつか、気があう仲間を求めてーーーーー

雪の日の出来事

○○病院前～
ガシャーン
俺は今学校から家へ帰る為バスに乗っている所だ
おっとすまない俺の自己紹介がまだだったね
俺の名前は橋田貴弘中学三年生だ
今の時期一月は俺の同年代は受験で忙しい
俺は自分の将来に希望は持っていない居てもいいし居なくてもいい
そんな存在だと思う
実際友達と呼べるものはないし彼女も当然いない
しかしそんな俺でも趣味はある
それは音楽を聞くことだ
音楽だけは唯一の楽しみであり生きがいでもある
エルヴィス・プレスリー
ビートルズ
アニマルズ
ローリングストーンズ
俺は音楽だけあればそれでよかった
「あ～○○公園前～○○公園前～おりる方はボタンを押してください」

あっ俺の家の近くだ降りないと
ピーン
俺はボタンを押した
はぁ～間にあったな
俺はそう思いながらバスを降りた
「う～さぶっ！！」
思わず声がでてしまうぐらい外は寒かった
雪もかなり降っている
さあ～早く帰るかそう思った矢先だった
「あっあぶなーい！！」
キーン
赤い自転車がもの凄い勢いで・・・
「どわあああああああああああああああああ」
ドンッ！！

SIDESTORY雪の日の出来事

ん？
ここはどこだ？
見たことない部屋だぞ
部屋には可愛らしい人形やぬいぐるみがたくさんあった
まさか俺誘拐されたのか・・・？
しかしなんか体が痛い
「んっいたっ！！」
なんかじんじんする
ガチャ

誰か来たみたいだ
「あ～変な人がいるぅ～」
五歳くらいの女の子が部屋に入ってきた「おっす！！」
俺は爽やかに挨拶をした
「・・・・・」
「しかとかよ！？　せっかく必死に挨拶したのにっ！！」
「・・・はんっ！！」
なんか馬鹿にされた
しかしそこで俺は怒らない
「ここはどこだーい？　麗しき少女？」
「・・・って居ねぇし　俺めっちゃ恥ずかしいじゃん！！」
しーん
なんか死にたくなってきた
パンッ！！
「いてええええええ！！　なっなにするだーっ！！」
俺はちょっと過激に反応したどうやらＢＢ弾が俺にあたったらしい
「きゃはははははは」
さっきの子だ
「また貴様か次はゆる・・・」
パンッ！！
「どわあああああ」
パンッ！！パンッ！！パンッ！！
「まっまけるかあああああああああああああああ！！」
俺は叫んだ
「！？」
「ひっさーーーつ我流天竜勝けーん！！」
俺はアッパーをした！！
「なっ！？なんだって？」
なんとよけたのだ
「はんっ！！」

腹が立つ奴だこういう奴が居るから・・・・・（長くなるので省略）だ
「ただいまーーー」
下の階から声が聞こえる
「あーおねぇちゃんがかえってきたあああ」
なに！？・・・おねぇちゃんだと！？
　お姉ちゃんがいるというのか！？
「お姉ちゃんオカエリー」
『ただいま～」
「なんか変な人なてるんだけどお」
「へ？変な人」
「うん変な人」
やばいやばいぞ殺される・・・・・
姉ちゃんといえば化け物だろおおおおおおおおおおおお
「あ～あの人ね」
「あのひと～？」
「うんあのひと～」
やばい階段に上がってきたぞ・・・・
どうするどうする俺！？
1謝る
2自殺する
3これをきっかけに交際を始める
どうするどうする個人的には3がいい333
ガチャ
「あっ」
こいつはさっき俺に自転車アタックしてきた奴・・・・・
「さっきはごめんなさい！！」
「へっ？」
『自転車でぶつかっちゃって』
「あ～それねきにしないきにしない」
「ホントすみませんでしたっ！！」

本来ならぶん殴るか彼女のあまりの誠意(かわいさ)にめんじてゆるしてやるか
「いいよいいよ」
俺は優しい少年風にいった
『ホントすみませんでした！！」
「だからいいって」
俺はやさしく言った。
『ありがとうございます！！」
彼女は深く礼をした
「きみのなまえは？」
俺は名前を聞くことにしただってかわいいんだもん
「松田優花です。」
「松田優花か～いい名前だな～」
「そうですか？」
「そうだよ」

おれはこんときしらんかったよ
このひとが俺の人生を百八十度かわることになるとは
つづく

日陰の花（前書き）

前回までのあらすじ
魔王を倒した勇者ラクスの前につきつけられた
新たな事実
そして最後の敵とは
いったいなんなのか？

日陰の花

拙者服部雄三でござる
覚えテルでござるか？
なにしろ作者の更新が遅いもんで
困ったものでござるな～
雑談はこのぐらいにしといて
本編をはじめるとするでござるかな
では始めるデござるよ

日陰の花

「あ～松田！！」
淳平は寝たままだ
「まつ・・・松田君おきなよ」
隣の女の子が優しく起こす
「う～んなんでしょうか～？」
俺はさわやかにおきた
「やっとおきたか！！松田！！」
ボカッ！！

「イッタ！！殴ったな先生」
「寝るからいけないんだろうが！！」
また怒られた
「まあいいこの問題解いてみろ！！」
「わかりましたよ～」
俺はさわやかにといて見せた
「正解だ・・・」
先生も驚いてるぜ
しかしこれには種がありまして隣の
小村さんに聞きましたのさ
「ありがとな～小村さん～」
俺はさわやかにお礼を言った
「あっ・・・どういたしまして」
小村さんは恥ずかしそうにいった

「今日はここまでだ明日テストやるからな～」
いきなりのテスト宣言だこういうのが全国の子供たちのやる気を
下げてるとあっしわ思いますね
まぁ今回は特に変わった日常ではないので
今回は小村さんについてかたろうと思いま～す

小村　佳奈子
この方とは私松田は三年間クラスが一緒なのでありまして
まあだからどうしたという話であって
じゃあ小村さん視点に物語きりかえるか～

小村さん視点の愉快な物語

さっきの授業の後

「佳奈子ってさ～　絶対松田の事好きだよね～」
「えっ！？　そっそんな事ないよ～」
「あんな奴のどこがいいんだかね～」
「だから違うって～」

この後私はしばらく言い合いになったのでした

もー春ったらカッテに妄想してさ～
松田君の事は好きじゃ・・・なぅいよ
考え事をしながら廊下を歩いていたら
「小村殿～～～～」
服部君と・・・
「あっ！　小村さん」
松田くんだ・・・
「あわわわわ　まっ松田くん？？？」
ダメだ・・・きょどっちゃう
「小村殿？　どうしたでござるか？」
「はひっ！！　いやっ！！　別になんにも」
「小村さんっていっつもきょっどてるよな～」
「えっ！？　そうかな？」
私いつもきょどってるのか・・・
「あのーいいでござるか？」
「あっいいよ」
「実は・・・小村殿におりいって頼みがあるでござる」
「なっなに・？」
「これを松田殿と一緒に先生に渡してほしいのでござる」
「えええっ！？」
嘘でしょ～
「俺もかよ！！　自分でいきゃあいいじゃないか！！」
「残念ながら　拙者はあいにく先輩方に呼び出しを
くらったのでいけないでござる」
「またかよ！！　そんなのイヤだよな　小村さ・・・」
「私がまっまつ松田くんと・・」
「・・・・雄三　っていねぇし！！」

「しかたないね　二人でいくか？」
「？もどった？」

服部君に頼まれたものはプリントだ
どうやら今日が期限らしい
なんのプリントかは教えてくれなかったけど

「くそ～～～　先生どこだよ」
「先生ぜんぜんいないね」
私たちはかれこれ三十分探していた
「あきらめて帰ろうかな～」
松田君がぼやいた
現在時刻は五時部活生徒以外はもう下校している時間だ
「ちゃんと探さないとだめだよ」
「わかってるよ～」

数分後

「すんごいことといっていい？」
「なに？」
　「先生の机にプリントおきゃあいいんじゃねぇか？」
「あっその手があったか～」
なんでもっと早くきづかなかったんだろう

その後役目を果たした私たちは帰ることにしました
「雨降ってるし！！　マジかよ」
外は土砂降りだ
「かっ傘あるけど一緒に帰る？」
アーッ私なにいってんだろう
「マジで！？　じゃあお言葉に甘えて」
「あっうん」

帰り道

「あっ雨　すっすごいね～」
「すんげぇ降ってるよな～」
今私たちは相合い傘で帰っていた
「明日体育あったけ？」
松田君がきいてきた
「あるよ」
「まじかよ！？」
「まじで」

そんな話をしながら今日は

家帰った

楽しかったな

オタク達の休日

やあ～どうも松田準平です
前回は小村さんを紹介しましたが
まだ登場人物が少ないんですよね
番外編も入れると～
とまった気づいた人もいるかもしれないがって
こんなの読んでる奴いねぇよな
文学史上最悪の駄作だもんな
で俺の名前は松田淳平ＯＫ？
で現在時点の登場人物はなんと
松田淳平　主役
服部雄三　おたく忍者
賢治　第三話で紹介するよていだったが延期出番がない
山田　おたく（豚）
母　いずれ紹介する予定七話ぐらい？
遠藤さん　近所のこわいおっさん
テディベア（達郎）　巨大な熊
橋田貴弘　番外編に登場
松田優花　番外編に登場
小村佳奈子　日陰の花
東山春　小村さんの友人
と計数十名というキャラの少なさまだ定番ができない
定番って海行ったりだよ！！
まあいいけど今回はこれでおしまいとはいかんよ
今回は山田の休日やるわ
次回は賢治の一日
その次が俺の家族の一日だ
では本編へ

オタクも楽じゃない爆

「ふぃぃぃ暑いなぁ　まだ四月でぶよね高橋殿」
「そうだなっち　木村氏はどうですか？」
「いま1ちゃんねるに書き込んでるから話しかけないで」
「ふぃぃ」
僕山田今日はみんなで街のショップいくんだぶ
高橋殿と木村殿とねｗｗｗ
「それにしても人多いっちね」
「そうだぶ～　みんな多いぶー」
「おいおいこのスレレベル高すｗｗｗｗｗ」
「木村氏はこんなところにきてまで1ちゃんか笑」
「うるさい・・・カス」
「なにをーーー！！」
二人はつかみ合いになってるぶー
「やめるぶー」
「「ぶーぶーうるさい　っち」」
二人に言われたぶー
「あっ山田達じゃん」
聞き覚えのある声
「よっす」

「賢治殿」
久しぶりに会ったというか久しぶりの出番だ僕も
「あれ！？一人っち？」
「いや・・・待ち合わせ」
「まさか彼女とか？」
「ちげぇよ！！淳平達とだよ」
あーあのぼんくら
「松田と？」
「ああ後忍者と・・・エリナ」
なにーーーー！！エリナ様と！？
紹介しよう
エリナ様とは学校一の美少女で
その美貌から札幌の沢尻エリナともクイーンとも呼ばれている
しかし性格は良くないしかもドエスだ
しかし一部のM男からは絶大な支持をえてる
山田もその一人だ
「おっ来たみたいだぜ」
「なーっち」
「嘘だろう？」
うるさーい愚民どもエリカ様に興味あるとは以下略
「まったあ？」
白い肌に整った顔スタイルのイイカラダ・・・エリカ様だあああああとその他
「待ったでござるか？」
うわあああああエリナ様だ
「待ったでござるか？」
服部殿に
「待ったか？」
松田笑

「めっちゃ待ったぞ！！」
「ごめんねー　ねぇなにこのオタク達マジきもいんだけど」
うわあああああああさっ最高だ
「きもいとはしつれいっち」
もっと怒れよ
「ふふ・・・オタクじゃないクリエイターだ」
もう意味わからないぶー
「やめろよエリナ　そういうことというの」
「はーい」
エリナ達はさっさと消えてった
「失礼な奴っちね山田ど・・・」
「ハァハァハァ」
「ってきもいっち」

この後我らは買い物を満喫したぶー

帰りの電車

「今日は楽しかったぶー」
「そうだっちね」
「この絵師絵うますwwww」
「まあ一人論外ぶーね」

「山田殿はよいお方っちよね」
「そうでぶーか？」
「そうだっち」
「じゃあ僕帰る」
「さらば木村殿」
木村殿は手をあげてた
「じゃあおれっちも」
「じゃあでぶー」

帰りの電車の中山田は思った
僕はなんて恵まれているんだろう
みんな優しくて昔よりかなり良かった
また明日も良い日であることを祈って帰った

不幸な男

前回オタク達の休日で久しぶりに登場したね
賢三くんの出番が来た
あの熱血男の出番が来てしまったか
はっきりいって悲しいよ
まあ友人の出番を喜びましょう
以上松田淳平でした

四月も後半にさしかかったか
俺は朝は走って学校へいく
「いいねー淳平とはおおちがいじゃ」
遠藤さんだ
「ありがとうございます」
「かっかかか頑張れよ！！」

学校

「おっす賢三」
淳平か
「おっす」
「また走ってきたのか？真面目な奴だなぁ」
「そうかぁ？」
こんな話をしているとある女が走ってきた
「賢三ーーー！！　おっはよお」

エリナか・・・
「おはよ」
「朝から熱いな～　おふたりさん」
淳平の奴人事だとこれだ
「うるせぇから」
「そんなのみんな知ってることだしねぇ」
また・・・この女は
「いや違うからな」
「おはよぅ」
小村さんだ
「あっ小村さーん　よっ」
淳平が挨拶すると
「あっ・・おはよぅ」
恥ずかしそうにするたぶんあれは・・・
「あれわ惚れてるねぇ松田のバカに」
言うなよ！！
「なんか言ったか！？」
「なーーーんにもーー」
「腹たつ女王だ」
「なんかいった！？」
「なんも」
はぁ馬鹿だなこいつら
「おはようでござる～」
「よー雄三」
俺はふつうに挨拶をした
「よっ馬鹿忍者」
淳平はからかった感じだ
「おたく忍者相変わらずきもいわね～」
いやこいつのはひどいだろ
「エリナ言いすぎだろ」

「別にイイデござるよ」
また・・・こいつは本当にお人よしだな

俺があいつらと出会ったのは入学式だった
とりわけ目立つ淳平
忍者みたいな格好してきた雄三
やけにつきまとってくるエリナ
俺は小学生の時はクラスの中心だったがいまは・・・
「おーい賢三早く来いよーー」
こいつらの子守だ
疲れるが悪い気はしない
友人とはこんなものだろう
「わかったわかった今行く」
昔は独りだったかもしれない
周りから見れば充実してたかもしれないが
俺自身はいつも満たされなかった

かなり昔の話だそう遠くはない
彼の父親は有望なボクサーだった
しかし仕事の事故で拳をつぶしてしまい
それを苦に自殺をしていたのを彼は知らない

「賢三ーーー！！かえーろ？」
エリナかこいつは
入学式の時ぶつかってからずっとつきまとってくる
ようになった
「ああわかった」

「でさ～○がさー」
「まじで？」
こんな多愛のない会話がいつのまにか楽しくなっていた
俺はかわりつつあった
前とは違う生活を俺は楽しんでいる
「じゃあね賢三～」
「じゃあな」
エリナと別れ
一人帰った

「ただいま」
「おかえり」
兄さんから返事が帰ってきたが
「母さんは？」
「また若い男とでかけたよ・・・」
「そうか」
俺はそういいのこすと自分の部屋に行った
「ふー」
俺は部屋に入るなりベットによこたわった
ああねみぃな
俺はそう思ってるといつのまにか寝てしまっていた

プルルルル
「ん？」
携帯が無造作に鳴り響く
「もしもし」
俺は電話をとった
「あのー警察ですけど賢三君ですか？」
「はい」
警察から電話がかかってきた
「君のお母さんが逮捕されたよ」
「えっ？」
そう最悪さ
いつだってそうさ
最悪なのはここからさ

俺は母さんにあおうとは思わなかった

シリアス淳平

『・・・あの私■のことが好き』

ーー誰だっけーー

『おい、おいてくぞ』

父さん？？？

『意味なんかないさ』

『お前は・・・』

『ただの人形だ。』

なんて夢をみたけどＤＯ？

とゆーわけで久しぶりですね今回はなんと

最終回！なわけなくちょっとねシリアス過ぎたし

久しぶりに俺の出番と今思えば謎が多いよな俺

ではーーーーー本編行きますか

俺の名前は、松田淳平どこにでもいる中学生だが

ある日をきっかけに古畑中学生になったのだった・・・
うそだ
「なにやってるでござるかー？」
うるさい忍者がきやがった。。。
「あー、俺は日本の死刑制度賛成派の
国民が多い理由を考えていたんだ」
むろん嘘だ
「嘘はいいでござる」
さすが幼なじみだ
「ば、ばれたカッ！！」
俺はかっこよくいいはなった
「淳平どのは単純でござるからなぁ」
むかつくんだが
「うるせぇ！お前には伏線をはりすぎて
困ってる作者の気持ちを考えたことがあるのかぁ！！」
「ないでござるよ」
あっさりいいやがって・・・
「お前は許せない奴だッ！」
俺はかっこ・・・
ごん
「いたっ！」
本で殴られただと・・・？
いや、違う！教科書だ
まさか今は授業・ー・・・
「うるさいんだけど、君たち廊下にでてて」

「ふひひさーせん！！　でも先生この忍者が話かけてきたんですよ」
俺は、さわやかに嘘をついた
「本当か？」
「嘘でござるよ！！

あいつがすべての諸悪の根元！
あやつを倒さない限り
拙者達には未来はないでござる」
またまたわかりやすい嘘を
「んー、どうでもいいけど早く廊下でて」
面倒くさそうにいいやがって
「いやいや　あいつがわるいんですよ！」
俺は手をふるふるしながら言った
「やかましい！！！！」
ごん！！
「ッッ！？」
目の前が真っ暗になったーーーー
声が、聞こえる
なんだなんだ
まさか、俺は・・・

「ハッ！夢か」
どうやら夢をみてたようだ
「いたっ！」
頭がいたむ
「あんにゃろーめ・・・」
あれは夢じゃなかった。
リアルだった
「おや、起きたかい？」
保険室の先生が優しく言った
「ええ、まあ　俺は一体どうしたんすか？」
先生はイスから立ち上がり言った
「死んだのさ・・・おまえさんは」

「はっ！？」
先生は高らかに笑いあげた
「はっははははは　冗談だよ。
まさか真に受けるとはな
君は教科書で殴られて気を失っていたのだよ」
先生は女だが変わった喋り方をする
理由はよくしらない
「よかった～」
「それより、もう下校時間だ。
君も帰ったらどうだ」
ふと時間をみると五時だった
どれだけ寝てたんだ俺
「はい、わかりました」
俺は保険室を出た

『やっぱりあの子は・・・』
なにか聞こえたが聞こえないふりをした

あー、頭が痛む
あのセンコウどれだけの力でなぐったのよ！
いつか仕返ししないとな
校舎をでると
周りは運動部が部活をしてた
「元気だねぇ」
俺はなんとなくつぶやき
校舎を離れた。
俺はちなみに帰宅部だ。
これといってやりたい事もない

仲間がいて共通の事をやるっていうのは
やりがいがあるかもしれないが
俺には興味ないなー

あれっ？あそこにいるのは？
「おっ！淳平じゃないか」
遠藤さんだ
「こんちわっす」
頭をさげてあいさつ
「今から焼き肉やるんじゃがよかったらこないか？」
やった！
「もちろんいくっすよ～」
遠藤さんについていくことにした

ジュー
肉がきれいに並べられている
「にくぅー」
遠藤さんの孫娘がはしゃぎながら言った
「あわてんでも肉はいっぱいあるぞ」
遠藤さんは優しく言った
「おらー、肉は俺のもんだあああああ」
俺は華麗に肉を三枚取った
「あうー、あたちの肉がぁ」
悲しそうにいった
「こらーーー！！　淳平ばかりたべるでない」
「わかりましたよ～」
俺は渋々謝った。
肉があまり減らない
「うー、もうくえね」

俺ははらいっぱい食った
「ありがとうございましたー、遠藤さん
でもなんで？おれなんかをよんだんですか」
遠藤さんは言った
『なーに、二人じゃ寂しかったしのう
礼を言うのはこっちじゃよ
それにおまえは家族も同然じゃないか』
そうか
前とは違うんだな
無理に過去を思い出す必要はなかったな
ありがとう

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0096d/

まっちゃんと愉快でもない仲間たち

2010年10月16日02時42分発行